

"jelneede"

acp ed jopel, jopel ed hup, hup ed uep, jon uel aitel aci. acj op sool jolel.
se jel ef nce til aci sef le idm. up, ef scnlr til le lmls n.

m nr delj lr sml lonf cnj rhea. acnr, m scl nup.
aclj drcn nozel lon lolo dojlel. jee m nr noj lndej ife pan lenf. upn cnj mf
clcpcej ap hup pan uopwrcn. hmn sebbe ef eel mf cd sep lr. zil i, sebbe en
pan m.
c sml, lifcl il ez. jlcncf i jlccl, cn didl.

"n..."

lc leo, m lnd c jlccl. upn hupml i doif.
"fej n, jol nr mf ef"
jrcs scl ded l'm jccnr. fil m nr ued i lofcl nel se ed def i do mf, lcl se. seo, m
en nr ued i lofcl nel do lcl pa fil i lofcl nel dohly lcl pa, dm m cn poj dlm
f'epc.

"m lacj lnel jec..."

leo de i noj lr se ez le pa scl m lr.
nepel cnj. ap hup l'm nr op ap uep. m nr ued dol uel fil nr lcl ml sm.

lc ap hup leeu, m hwdcl cnj. cd se acnc, m cnjcl eel mf len ded.

"hup"

se elj pal leedc eel mf lr lml mf lofs jon m cncl lml nozel, fil hio, lr dc ife.
upn cjl lr, pcb scj lr.

"jocno"

jon pcb ela lcl m. m jef hl ed sebbe. fil se elacl m.

"beol"

m jlcncf de i jlccl, aclj didl.

"acj aer..."

seedc jel lenil de m. m nr nre enfo dolb um.
lml mf scl ucl. so jcl jon ol lcl de se jec. m nr hio upc i. loel m eni jcl. mf,
lr ej m jof pmo jec. m scl se hooj le nclm m jef noj.

m ne hcj. fil m ef il i pa. m jml jen acdcf ifc fup. jon m ed ucl am i ac
scjee. ilac, m ef lecl ol enuc acn se ef ucln nr.

lei m ne m, m brop um m. m ef accd. jee m upie noj accd.

m ef il i pa dm m ef accd. fcl m dcpe ela sebbe seln. sep, lm accd lei
ela seln accd dm le ef accd, idis up, idr, hup iden scnlr.

m en cnj ed brou, nevel de cnj. m nevel sepeel, hooel vel jepeel.

scj"foel jil jilbej. od m ilil hooe neede hml jec. ocon, m scer ed li cd hml"

m nif so cd le jel jec. se if hio loon tel m il li. hel, m sepeel lea hml lonf
jilbej ilj ocd.

m lillil le li jil scfo uelf apeden jil ml. sei m jilil li, jon m ne m cden sepe.

m zccnif scfo, nif ncl dm acm hml scnlr li ife. li lol m if velc, fil li jej hml o
aru o sepe.

neede--m laf ml hooe lel joi--lillil m, jilil il m. hnj ij noa li jil ucl hml
lenoc ni.

m mlil jil li lel velil fil m nif neede ef arz i li. m mlil li lel se lonf ni delj.
qm li apedil il m enfel.

li scl nci ael jej. li jilsej jil hoo, nooj neep, lej enpe olen delj, acil vel o
acp lien ojn. ml, dcl li lien lej if cdpe. dcl scl j acf qm sepe acf mlilsej
ilcl hml.

neede lenil aped m. qm m ouil ucl noj.
scj"ic, non jilcl sepe"

m lolcl ucl elj e penj lael. lool, m sclil nupc dm le acm ef lcel mlil. fil le
lilil vel il m. lcl, m ilil um le dm m aeelcl laedc. sco, neede li hml m. nj
en jepil ejf e lol scj fil nif ncl. pe, nif ncl dm sco nj li lol.

lc lonose, le lmlil. cd se, m nif le leeu ail m. fil m nif nj il jen de lol cd
le.

m hooel cnj.

lc hmlil, m il le neede cd se jel fil jil. li laf ml m jepe. nj lool jon e ae
jil i lol. qm m jcn li ef acm ucl m il li.

m ni nof ne lil il il li cd acj. se ef dm m ni ncl o ued i uopil. m scp mljel
noj lacj ail iz fil il.

ji li leeu m cd hmlil, li laf joi.

"ol sepe en lacj ail, jon non acf am i sepe vel uopil jepe"

m en ni jccr ued i se penj fil cd sepe, scnlil. acj, m lcel jel se leedc cnj
ocon. m nil joi hml.

hio, m ni ued i uopil ilacn m jilil jil noj8 m iljcl i noj.

m il li li jilcl, ni li ncl. fil cnj e neede jil um il m jec. m lolcl eel lon
lj. sepe, neede o uopil ej loi i delj.

ჟმ ლცლლედო სჯსლ ილ მ უღ სოქს ლლ ნედე ელ სოლ, უღ მ ნონ ნედე ელ სოლ.

სეო, სე ელ სეო. მ სსს სს ლცსო, სს ლე ლოჯ ონლ.

"ილთონ ელ სე სოქ სოლ ნოჯ ილ ლ იზ"

ლთ ლო"მ სოქ სოლ სე ენ დმ მ ნი სედ ი სოქ სს დმ ნედე სიდ მ ლელ სეჟ ო უენოლ"

ჰმ, მ ნი სედ ილ ენ სოქ სელ სე ი. მ ნილ დელ დოლ სე ლ. მ ლილ ოლელ ონი ენლ.
ჟმ დუჟოლ ლი ოლ ეელ. სე ელ ლილსი. სე ლილსი ჰოლ ოს ჯოი ნედე. ოდ ჟე, მ ოსილ
დოელ ნოი ე ნედე. მ დილე სე ჯოი დონელ ილცნ ნედე ენ ლილსი სე ჯოი სოჯ.

მ სოლ ლილსი ი ლმ. ნედე ენ ლილე მ ნი დელ ლო ლი ენ ლილსი მ ოს ნოი ლილ ნი.
მ სოი ლი. ჰიუჟე მ ნი დელ. მ ნი სედ ი ჟელ უე ო უელც უე ნედე დოლ მ სოი ლი.
ლც ლოლ ოლენ ლცსო, მ ლილსი ლე ლეუეჟ მ.

ლე ნილ მც ი ოი ჟეცხ იზ ლე ბიჟ ედ ოი ჟეცხ იზ ილ...8 ოცნ ლე ლეუეჟ მ. ლილ, ლე
ლეუილ მ დმ მ ბიჟ ედ ლე. მ ენ ლოქ ედ ლე დმ მ სოქოლ ნოჯ ილ ლე ნედე იზ.

სლელ, მსელ ლენი ნონ ლც სოქონ. ოდ ოლსილ, სე ჟელ, ლც სოქონ... ლი იელ ი ნონ ოდ
სილ ნონ ჯოი. ჟმ ლი ლოლ ნონ ლოლს ლედეჟ ონი ლე ნონ ჯოი.

ნონ ლილსი სეაბე ოცი ელ სეჟ სილ სოი ლილ ლი ოდ ლილსი. ლელ, ლი სელსი სოლ სე ოცი ონი
ეჟნ ე უედი. ნონ ნილსი სე სოლ ონი ონი ლილ. სილ ლი ნილ სეცი ონი. ჯონ ნონ სენსილ ჯოი.

"ოლ სუჟე ენ ლოქ ოილ, ჯონ ნონ ოლ ონი ი სუჟე უღ სოქს ჟეჟ"

ლი ნი ელა სედ ი სოქს. ილთონ ნონ ჟელ ჟენ ლი. ჰიცი ლი ჟეჟ ელ ნონ ჟელ ჟენ ლი ეჟო. ნონ
ჟელ ჟენ ლი ილმ ლი სოი ნონ ნონ ნი. ლი ილ ლენი ნონ ლონი ნი დელ სეა ნი ლილსი ჟელ
უე ნონ. ჰიუჟე სე იდოი ლი სოი ნონ ნონ ნი. ნონ სია ჟენ ჟელ ლილ სოლ ჟელ დოლ ლი
სოი ნონ. ონი ლილ ელ ილ ოდ სე სილ ეჟო. ლილ, ლი ლენი ონი ნონ ეჟო.

ოილ ელ რეა. ლელ, ნონ სიჟე სიჟე.
ნონ ჰელ ლილ სილსი ლოლსი ილ ლონი სილ ლი.

მ დუჟოლ ლილსი ო ლმ, ოსეჟ ონი.
მ ილ ლილ ნედე.
მ სოქ ნედე უელც მ.

m nī pēa ɔm jēnɔj dēlj, sɔfēj nɔj le um ɪz.
m helej ɔlɔcɔj ɔlen ʔɔl ʔɔl m jɔ ɔɔ ɔljɪl.

--neede l'm ɪl jēn ɔɔ ʔə jēl
m jēn enɪ lēn jɔd ʔɔn lɪj.
dɔf m, ɪjēl ɪl m lɪnʔel --jɔl jēlneede l'm ʔɔɔɪ.

『ソノヒノキ』

白は青へ、青は赤へ、赤は黒へ変わり、そして闇が世界を覆った。1日はいつもと同じように終わろうとしていた。しかし世界にとって何でもないその日は、この少年にとっては非常に重要なものだった。

テラスにて、日没を見ながら私は悩んでいた。いや、憂えていた。

心の中でここにいる私の体を眺めてみた。人形のように立っている自分が見て感じられた。この目は死人の目のように赤い光を映していた。そうか、これが今の私の顔か。不気味だな、私ではないかのようだ。

テラスを離れ、私は部屋に入った。椅子に座り、カレンダーを見る。

「ああ...」

そう呟くと私は椅子から立ち上がってベッドで仰向けに寝転んだ。

「ああ、腐ってるねえ、私の心は」

天井には鏡が付いている。私はこれが好きだ。だが、もしこれが落ちてきて首を切られたらと考えると...怖い。いや、首が切られるのが怖いというより、頸動脈が切れるのが怖いのだ。鮮血が飛び散る様を見るのは嫌だ

「私は生きてるのかねえ...」

自分に再度呟いた。私以外は誰も居ないこの部屋で。

目を閉じた。私を感じている赤い光は黒い光へと変わっていく。闇のせいで怖くなった。が、同時に安心も感じ始めていた

赤い光が消えると私は目を開けた。すると、鏡の向こうに一瞬彼女の顔が見えた。

あれ？

ということはあの美しい顔が私の隣にいるのではないか？しかし隣を見るが、いるはずもなく、ただ蚊が居ただけだった。

「やあ」と声をかけると蚊は逃げ出した。途端に殺意が沸いた。が、逃げられてしまった。

「クソッ！」

私はもう一度椅子に座ると、カレンダーに目をやった。

「今日だ...」

またこの日がやってきた。とても嬉しくて踊りたくなるほどだ。

拳を見ると、手首に傷があった。また切ったらどうなるんだろうな。痛いだろうね。泣くかもしれないなあ。そもそも、何でこんなことしたんだろうなあ。この自問によって私は今まで生きてきたのだ。

劣等でもないのに何も上手くできない。何でもある程度はできてしまうので、情熱を注ぐということができないのだ。力ある無能力者だな、私は。そしてそれは矛盾的だ...

もし私が他人だったら、こんな男、殴っているだろうな。だって私はただの怠け者なのだから。こんな自分は愛せない。

何にも上手くいかないのは私が怠けているからだ。なのに怠惰を直すことができない。怠け者は怠惰だから怠惰をも直そうとしない。始末におえないものだ。

拳を見るのをやめると、私は再び目を閉じた。現在を閉じ、未来を開いた。

「もう何年になるかな」と小声で呟いた。「あの美しい姫と会ったのはいつのことだったか。いずれにせよ、私は始めてあったときに彼女のことを愛してしまったのだよ」

あの日、私は何を考えていたのだろう。彼女に出会うなどとは予想だにしていなかっただろう。似合わないジャケットを着て、何とはなしに外へ出たのだ。

そして家の近くの暗がりには人が居るのに気が付いた。もし彼女を無視していたら私は今の私でなかっただろう。

暗がりを覗き込んだ私は驚いてしまった。というのも、とてつもなく美しい小さな少女がそこにいたからだ。彼女も私と同じで子供だったが、美しく華麗で魅力的だった。

姫——と私は呼んでいるのだが——は私を見ると美しく微笑みかけてきた。天使の微笑みは美しいが天使でさえこのようには微笑めないだろう。

「嬢ちゃん」と呼ぼうとしたが、彼女があまりにも美しいので姫と呼ぶことにした。戸惑いながら彼女をそう呼ぶと、彼女はゆっくりと私に近づいてきた。

彼女は髪を長く伸ばしていた。桃色のシャツに薄青色のセーター、フリルの付いたベージュのスカート、頭につけた白玉のアクセサリー、とりわけスカートの大きなリボンが変わっていた。リボンには2本の紐が垂れており、彼女の膕まで届いていた。

姫が私に近づいてきたが、私は身動きを取れなかった。

「やっと見つけた、あなたを」

姫は始めに小声でそういった。全くわけがわからなかった。面倒なことになるのではと、不安な気持ちがよぎった。が、結局、姫は私に何も望まなかった。姫に一目惚れしてしまった私は彼女を助けてあげようと思ったが、姫は何も望まず、ただ私の隣に佇んでいただけだった。互いに名前さえ知らなかったが、私達は幸せだった。ただ一緒に居るだけで。

12時を過ぎると彼女は立ち上がった。私は別れを悟ると共に、再会をも悟った。

私は目を開けた。

彼女にあって以来、私は毎年この日になると姫に会いに行く。彼女はいつも私を待っていてくれる。私達は会ってその年の出来事を語り合うのだ。そして彼女に会って自分と彼女の存在を確認するのだ。

今日も彼女に会うと考えると少し緊張する。緊張の半分は幸福で、残りの半分はしかし死の恐怖である。私は毎年彼女に会って、生きるべきか死ぬべきかを決めてきた。

初めて出会ったとき、別れ際に彼女はこういった。

「貴方が生きるべきでないなら、次に会った時に私は静寂な死を貴方に与えるでしょう」

今日までこの言葉を恐れたことはなかったが、今は恐ろしく怖い。今年こそあの美しい緑の瞳に殺されるかもしれないのだから。私は始めてそう感じた。

それにしても自殺を図ったものが死を恐れる？——私は自嘲した。

いつものように彼女に、姫に会いたい。そして幸せを感じたい。だが、姫の目は私に微笑みかけてくれるだろうか。私は顔を手で覆った。姫と死とが天秤にかけられていた。

すると私の中のもう一人の私が囁きかけてきた。姫は死と等価なのか。お前は姫を自分以上に愛することはできないのか——と。

否、断じて否。私はもう一人の私を追い払おうとしたが、奴は続ける。

ならばなぜ姫に会うかどうかを決めあぐねているのか——と。

「私は死が怖くて迷っているのではない。姫に生きる必要の無いくだらない人間だと定められるのが恐ろしいのだ！」私は声に出して奴に答えた。

そうか、私は死が怖いのではなく、それが怖かったのだな。そのことで私は悩んでいたのだな。私はゆっくりと長く息をついた。顔から手を離す。左手だ。この左手だけは姫に触れたことがある。以前、左手が姫の髪の毛に触れたことがあるのだ。私はそのことをよく覚えている。尤も、姫はそんなこと知る由もなかったろうが。

私は左手を頬にあてた。私が姫の髪に触れたことなど知らないのと同じで、姫は私が悩んでいることも知らないだろう。姫は何ひとつ知らないのだろう。だが、私は彼女を愛している。そしてそのことが私を悩ませているのだ。姫を愛せば愛すほど姫に殺されることが怖い、姫に否定されることが怖い。私ともう一人の私との言い合いが終わると、奴はいつのまにか消えていた。

奴は忠告に疲れたのか、その必要がなくなったのか、はたまたそれ以外か、いずれにせよ奴はもういない。いや、私が奴を必要としなくなったから奴は消えたのだ。なぜなら、私はもう行くかどうかを決めたからだ。

彼はいつも8時すぎに来る。毎年、この日の8時すぎに…。彼は私を見つけるとすぐに微笑みかけてくれる。そして私の好きなあの瞳でもって私の心を魅了してくれる。

私は彼と初めて会ったときに、この世界が彼にとってなんら魅力的でないものだという事を知った。彼の目を見て、私は彼がこの世界や他者を破滅させかねないと感じた。そして彼は寂しそうだった。だから私は言ったのだ。

「貴方が生きるべきでないなら、次に会った時に私は静寂な死を貴方に与えるでしょう」

——と。

彼は死を恐れないだろう。だから私は彼を殺すことができるのだ。私が彼を殺せる理由というのを彼は知っているのだろうか。彼が自分より私のことを愛してくれるからこそ私は彼を殺せるのだ。私に殺されるかもしれないと思いながらも私に会いに来てくれる。それは彼が自分より私を愛してくれるということ。だからもし彼が愛して

くれれば彼をもっと愛し、彼を殺して彼の魂を得るだろう。今年の彼の瞳はどのようなものだろう。そもそも来てくれるだろうか。

日が暮れていく。早く来すぎたのかもしれない。

彼を待ちながら、彼と私の思い出を思い出し始めた。

左手を頬から離すと、私は目を閉じた。

姫に会いたい。

姫に否定されたくない。

悩みを断ち切り、行くか否かを決めた私は平静さを感じていた。

私は毎年するように、彼女と私との思い出を思い出していた。

——その日に会うことができる姫

私は手で、左手で目頭の涙を拭った。

私の頭の中で、美しく微笑みかけてくれていた——私の愛するソノヒノキが。